

第3章

地域の教育資源の活用

— 体験的・協働的な学習 —

1 地域の教育資源を活用する意義

本章では、「地域の教育資源を活用した体験的・協働的な学習」について取り上げる。本誌冒頭の「本校の概要（4～5 ページ）」でも述べたとおり、伊達市とその周辺地域は、北海道開拓史やアイヌ文化に関する資料や文化財のほか、北海道・北東北における縄文遺跡群に数えられる史跡「北黄金貝塚」など、貴重な歴史・文化遺産が豊富にある。また近くにはカルデラの洞爺湖に有珠山・昭和新山があり、ユネスコから「世界ジオパーク」の認定を受けている。

次期学習指導要領では、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「**社会に開かれた教育課程**」の実現が目指されているところである。また「主体的・対話的で深い学び」の視点では、生徒同士はもちろん、教員や地域の人との対話を通じて自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が求められており、その例として「個人として考えたことを意見交換したり、議論したりすること」だけでなく「実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広める」ことなどが示されている。すなわち、教科・科目の授業で獲得された知識・概念や「見方・考え方」が実社会と結び付いたとき、さらなる学びの深化や成就感が得られるものと期待できる。地域の文化遺産や博物館・資料館等の活用については、現行学習指導要領においても明記されている。

— 《現行「世界史A」における内容の取扱い》 —

- (1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。
 - イ 年表、地図その他の資料を積極的に活用したり、文化遺産、博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして、具体的に学ばせるように工夫すること。

— 《現行「日本史A」における内容の取扱い》 —

- (1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。
 - ウ 年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること。

また、地域（実社会）で生じている様々な事象を把握したり、そこから課題を見いだして解決策を創造したりするには、「地理歴史」の枠を超えた複数教科・科目の知識を相互に関連付けさせたり、「見方・考え方」を働かせたりすることが不可欠である。したがって「地域の教育資源を活用した体験的・協働的な学習」は、科目相互の連携を図り、「見方・考え方」を育成する学習活動として大きな意義があるのではないかと考える。以上のような視点から本研究において実践した「縄文遺跡体験学習（１年）」「地域の人材を活用した歴史学習（２年）」「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習（２年）」の３点について報告したい。

２ 史跡「北黄金貝塚」を活用した縄文遺跡体験学習（１年）

伊達市内には縄文時代から近世までの遺跡・遺構が数多く見つかっており、なかでも北黄金貝塚は約 7000～4500 年前の縄文遺跡と推定され、貝塚だけでなく、儀礼の場としての水道遺構がほぼ壊れずに現存している点は全国的にも珍しい。貝塚公園内の「北黄金貝塚情報センター」では、発掘された土器などの出土品をはじめ、当時の生活文化を知ることのできる貴重な資料や体験コーナー等がある。また遺跡は黄金地区のほか有珠地区にも多く分布しており、続縄文時代に該当する「有珠モシリ遺跡」からは、装飾豊かな銚やクマとクジラを彫刻した儀式用のスプーンなどの骨角器が見つかる場所であり、それらは高校日本史の教科書にも掲載されている※１。

こうした地域の環境の下、本校では平成 15 年度から「総合的な学習の時間」において「縄文遺跡体験学習」を継続している。本校校舎が新設される際に行われた発掘調査で幾つかの貝塚の存在が認められた経緯（本校と縄文のつながり）もあり、郷土の文化遺産に対する理解を深めさせることなどを目的に、縄文学習をスタートさせた。実施にあたっては、伊達市教育委員会、伊達市噴火湾文化研究所、近隣市町村教育委員会等から学芸員の方々にご支援ご協力いただいた。

概要は以下のとおりである（平成 28 年度）※２。

「縄文遺跡体験学習」実施要領

- | |
|--|
| <p>１ 目 的 （１）地域の素材・人材を活用した体験的・協働的な学習を通して、郷土の自然や文化遺産等に対する理解を深めるとともに、地域への興味・関心を高めさせる。</p> |
|--|

※１ 北黄金貝塚公園公式ホームページ等の資料を参考。

※２ 平成 29 年度もほぼ同様の内容で実施したが、荒天により実施途中で中止となった。

(2) 科目相互の連携を図り、社会的事象の意味や意義、概念等を総合的に捉えさせることにより、生徒の思考力・判断力・表現力等を向上させる。

- 2 全体日程 (1) 事前学習 … 平成 28 年 10 月 14 日 (金) 5・6 校時
(2) 現地学習 … 平成 28 年 10 月 17 日 (月) 1～6 校時
- 3 場 所 (1) 事前学習 … 本校体育館
(2) 現地学習 … 史跡北黄金貝塚公園 (伊達市北黄金町 7 番地)
- 4 対象学年 1 学年全生徒 (A 組: 35 名 B 組: 35 名 C 組: 34 名 D 組: 34 名)
- 5 内容時程 (1) 事前学習 … 13:05 体育館へ移動・整列
13:20 事前学習 (講義)
「世界の中の縄文文化について」
伊達市噴火湾文化研究所 青野 友哉 氏
縄文スクスク森づくりの会 木村 益巳 氏
15:00 終了・教室へ移動
(2) 現地学習 … 「A・B 組」「C・D 組」に分かれて学習する。
- 8:40 9:20 11:40 12:20 14:30 15:20

【A・B 組】	移動	【午前・前半】 遺跡探検・見学	【午前・後半】 植樹体験	昼食	【午後・前半】 火おこし体験	【午後・後半】 縄文食文化体験	移動
	移動	【午前・前半】 植樹体験	【午前・後半】 遺跡探検・見学	昼食	【午後・後半】 縄文食文化体験	【午後・後半】 火おこし体験	移動

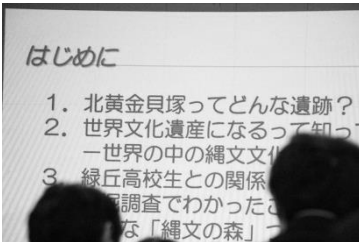
- 6 講 師 伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉 氏
伊達市噴火湾文化研究所学芸員 永谷 幸人 氏
伊達市噴火湾文化研究所学芸員 富塚 龍 氏
オコシベの会 河畑 敦史 氏
洞爺湖町教育委員会学芸員 角田 隆志 氏
縄文スクスク森づくりの会世話人代表 木村 益巳 氏
- 7 引率教員 第 1 学年団
- 8 持ち物等 指定ジャージ、体育用外靴、雨具・防寒具、帽子、軍手、リュックサック
など適宜、しおり、筆記用具、昼食・飲み物

(1) 事前講義

体験学習をまえに、外部講師の方々を招いての「事前講義」を行った。講師は伊達市噴火湾文化研究所学芸員 (文化財科学・博物館学・考古学者) の青野友哉氏、縄文スクスク森づくりの会代表の木村益巳氏に依頼した。青野氏には例年「縄文遺跡体験学習」の全体コーディネートをお願いしている。

青野氏の講義では、北黄金貝塚の特色や縄文人の生活だけでなく、地理歴史科における科目連携の視点から「日本の縄文遺跡が世界史の中でどう位置付けられているか」など、わかりやすく解説していただいた。発見された土器や動植物の

骨角、縄文人と思われる頭部人骨などの実物も持参していただき、生徒たちは興味深く講義に聴き入っていた。また「縄文スクスク森づくりの会」の木村氏からは、縄文人の生活と自然とのかかわり、現代における環境問題や保全活動の意義などを講義いただいた。同会は、北海道・北東北縄文遺跡群の世界文化遺産登録に向け、周辺の景観・環境保全や縄文の森を復元させるための植樹活動、子どもや市民向けの講座等をボランティアで実施している団体である。



(2) 体験学習

史跡「北黄金貝塚公園」まで徒歩で移動し（40 分程度）、現地での体験学習を実施した。体験学習の外部講師には、青野氏・木村氏のほか実施要領に記載された 4 名の学芸員が加わり、2 クラスずつ（全 4 クラス）に分かれて活動した。

午前は「遺跡探検・見学（学芸員によるガイド）」と「植樹体験」を行った。はじめに「遺跡探検」では、貝塚公園内の要所（貝塚・竪穴住居・水場・祭祀場等）

を順に巡り、学芸員の解説に耳を傾けた。竪穴住居は復元されたものであるが、床面の炉では鮭などが燻されており、生徒たちは五感で当時の生活を体感することができる。また学芸員の解説では、当時の気候（平均気温の違い）や植生（北海道と本州との違い）などにも触れられ、自然環境と生活・歴史との関連について学ぶことができた。

つぎに「植樹体験」では、木村氏の指導のもと、数種類の木の苗を植樹した。苗は前年度までの生徒たちが「縄文遺跡体験学習」の際に植えたものである。



午後は「火おこし体験」と「縄文食文化体験」を行った。「火おこし体験」は体験用の道具を使って実施する。とはいえ、なかなか火をおこすことは難しく、なんとか煙が出るところまでは到達するものの、すぐに火が消えてしまう班が続出した。「どの班が早く火をおこすことができるか」競争させたが、焚き火ができるほどの火をおこすことができたチームはなかった。



また「縄文食文化体験」では、当時の食生活を模擬的に体験すべく“縄文ハンバーグ”づくりに取り組んだ。材料には、市販の豚のひき肉（当時はイノシシ）、うずらの卵にクリ粉を使用し、よくこねて混ぜ合わせる。それを整形して茹でると“縄文ハンバーグ”の完成である。“ハンバーグ”というネーミングから生徒たちは、普段家庭やレストラン等で食べる“ハンバーグ”の味を想像していたはずである。ところが調味料は一切使用しておらず、いざ食してみると「だんご」のような食感でほとんど無味である。当然ながら「まずい……」「味がしない……」という率直な感想が多々あったが、改めて生徒たちは「いかに現代が飽食で調味料の効いた豊かな味付けの食事をしているか」ということを実感する。

以上のとおり、終日の体験学習で生徒たちは「遺跡探検」「植樹体験」「火おこし体験」「食文化体験」を行い、太古に暮らした人々の生活文化と自然（自然環境と歴史の相互作用）に触れる貴重な機会となった。さらには、縄文人のものの見方や考え方に触れ、現代との比較からその共通点や相違点などを考えさせることにもつながった。



(3) 事後学習

体験学習後、次のようなレポートの作成を生徒に課した。体験学習全体への取組に対する自己評価については、次のような結果となった。

質 問 項 目	回答者数・割合
5 興味・関心を持ち、主体的に取り組むことができた。	37名 (28%)
4 興味・関心を持って取り組み、知識を広げることができた。	51名 (38%)
3 体験学習で新しい知識を得ることができた。	42名 (31%)
2 体験学習に意欲的に取り組むことができなかった。	4名 (3%)
1 興味・関心が持てずに学習が終わった。	0名 (0%)

組 番 氏 名

< 研修レポート >

1. 今回の縄文学習は、どのような内容でしたか。

遺跡体験

植樹体験

火おこし体験

食文化体験

2. 印象に残ったものや、作業をイラスト等を書いてみよう

3. 今回の学習で新たに分かったこと、理解が深まったこと、感想などを書いてみよう

◎自己評価（体験学習全体への取り組みについて） ※番号に○をつけること

5 興味関心を持ち最後まで主体的に取り組めた。	4 興味関心を持ち取り組み、知識が広がった。	3 体験学習で新しい知識を得ることが出来た。	2 体験学習に意欲的に取り組めなかった。	1 興味関心が持てずに、学習が終わった。
----------------------------	---------------------------	---------------------------	-------------------------	-------------------------

4 地域の人材を活用した歴史学習（2 年）

2 学年では、「北海道みんなの日条例※3」の制定を踏まえ、北海道や身近な地域の歴史や文化、産業等についての理解と関心を深めるとともに、郷土への誇りと愛着を育て、地域社会への参画意識を高めさせることなどをねらいとし、地域の人材を活用した歴史学習を7月に実施した。

この学習で取り上げたのは、伊達市開拓の歴史である。伊達市は現在の宮城県南部に存する亘理町からの集団移住によって開拓された町である。仙台藩初代藩主・伊達政宗の重臣であった伊達成実を先祖とする亘理伊達家は、戊辰戦争敗北に伴い大幅に家禄を失った。15代当主であった伊達邦成は家臣たちとの議論の末、新天地を求めて北海道に移住することを決意し、明治2年8月に胆振国有珠郡の開拓を明治政府から許可された。以来、移住は数回に分けて行われ、約2700人がこの地域に足を踏み入れた。有珠地区周辺にはアイヌの人々が暮らす集落もあったが、アイヌの人々への礼節を重んじ、生活を侵すことがないようにとする規則をしいて家臣たちに忠実に守らせた。その結果、アイヌの人々との争いはなく、常に開拓を手助けしてくれる存在となっていった。

現在も祖先の地である宮城県亘理町との交流がさかんである。伊達市でも古くから武者行列の伝統が続いていたが、開拓の歴史と伝統を受け継ぐ夏的一大イベントとして「伊達武者まつり（例年8月初旬）」が昭和48年から市民の手により始められ、勇壮な武者絵が描かれた「山車パレード」や、騎馬武者・甲冑武者による「武者行列」が例年行われ、市民をはじめ多くの観光客を楽しませている。

こうした伊達市開拓の歴史と現在、亘理町をはじめとする諸地域とのつながりに精通し、「伊達武者まつり」など地域活性化のために様々な活動を行っている（亘理・だてきずなプロジェクト等）市内在住の西條晴彦氏を講師とし、講演とワークショップを実施した。概要は以下のとおりである。

地域人材を活用した「歴史・文化・産業学習」実施要領

- 1 目 的 「北海道みんなの日条例」を踏まえ、北海道や身近な地域の歴史や文化、産業等についての理解と関心を深めるとともに、郷土への誇りと愛着を育て、地域社会への参画意識を高めさせる機会とする。
- 2 実施日時 平成 29 年 7 月 13 日（木）5・6 校時（12:55～1435）

※3 道民が北海道のこれまでの歴史、北海道の持つ豊かな自然及び風土並びにこれらの中で培われた北海道の文化、産業等についての理解及び関心を深め、北海道の価値を改めて認識し、道民が一体となってより豊かな北海道を築いていくことを期すことなどを目的に、7月17日を「道民みんなの日」と定めた条例（平成 29 年 3 月 31 日施行）。

- | | | |
|---|------|---|
| 3 | 実施場所 | 体育館 |
| 4 | 対象学年 | 2 学年全生徒（日本史A・地理A選択生徒） |
| 5 | 講 師 | 西條 晴彦 氏（亙理・だてきずなプロジェクト） |
| 6 | 内容時程 | 12:50 体育館へ移動
12:55 学習のねらい説明・講師紹介
13:00 講演「身近な地域の歴史・文化・産業」
・伊達市の開拓、亙理町とのつながり（北海道史の視点から）
・様々な地域プロジェクト（伊達武者まつりの意義）
13:50 休憩
14:00 ワークショップ（グループ協議・講師からの助言）
テーマ「地域のためにできること」
14:35 閉会・教室移動 |

西條氏の講演では、先に述べた歴史の概要をはじめ、東日本大震災（2011年）以後の亙理地域との交流やボランティア支援等、広い視野から現在につながるあゆみと地域の課題について語っていただいた。

講演を踏まえ後半のワークショップ（講師と教員がファシリテーターとなる）では、グループに分かれ（10名程度）、①「伊達市の良いところ・悪いところ」、②「地域のためにできること・したいこと」の2点について、KJ法（生徒は付箋用紙に自己の意見を記入）によってアイデアを出させた。そしてグループで完成させたポスターについて、代表者に発表させた。



5 洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習（2年）

同じく2学年の生徒（これまで「世界史A」及び、「日本史A」「地理A」のいずれかを履修してきた）を対象に、「洞爺湖有珠山ジオパーク」を題材とした学習を実施した。伊達市のある西胆振地区（隣接する洞爺湖町や壮瞥町など）には、火山とそれに伴う自然地形があり、豊かな農産物や温泉・景観など有益な観光資源を生み出している一方で、地域住民は常に“いつ起こるかかわからない”自然災害と隣り合わせの生活を送っている。

近年では、日本有数の活火山である有珠山が2000年に噴火した。江戸時代以降の噴火は8回にのぼり、噴火の間隔は20～60年前後（19世紀以降は20～30年）となっている。すなわち有珠山は噴火を“繰り返す”のである。前回噴火から18年が経とうとしている今日、次期噴火に備えた災害対策はもちろんのこと、地域住民の防災意識をいかに高めていくかが喫緊の課題となっている。2000年噴火の際には、過去の噴火における教訓（前兆地震の把握と素早い避難行動等）が生かされ、生活に影響は出たものの、人的・物的損害は軽微であった。また2002年には、火砕流・噴石・降灰等の影響範囲を示した「火山防災マップ」が配布され、全国的にも有名なハザードマップとして知られるところとなった。

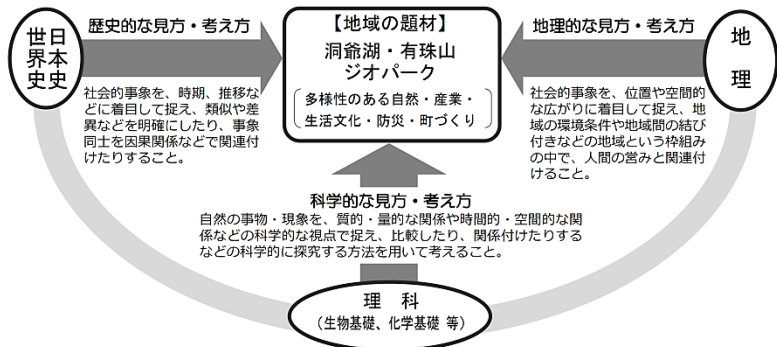
こうした中で、自然環境を観光資源としてだけでなく、教育資源としても有効活用していこうと、住民自らが「火山マイスター」となり、自然・防災に関わるガイド（災害伝承）としての役割を果たしている。現在はユネスコから「洞爺湖有珠山ジオパーク」の認定を受け、多くの来訪者を受け入れている。

すなわち「洞爺湖有珠山ジオパーク」は、本校研究課題である「地理歴史科における科目相互の連携」により「見方・考え方」を育成することにおいて、最も有益な題材の一つであると考えられる。本学習においては、地理歴史科のみならず、理科との教科間連携も視野に入れ、社会的事象を自然の事物・現象等と関連付けて総合的に捉えさせ、生活・文化の地域的特色に対する理解・認識を深めさせるとともに、生徒の学びに向かう力や思考力・判断力・表現力等を身に付けさせることをねらいとした。概要は以下のとおりである。

「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した地域学習」実施要領

- 1 目 的 (1) 教科・科目相互の連携（地理歴史科・理科）を図った学習を通して、社会的事象を自然の事物・現象等と関連付けて総合的に捉えさせ、生活・文化の地域的特色に対する理解・認識を深めるとともに、社会的・科学的な見方・考え方を育成する。

(2) 地域の人的・物的教育資源を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現することにより、生徒の学びに向かう力や地域社会への関心を高めるとともに、思考力・判断力・表現力等を育成する。



- 2 実施日時 平成 30 年 3 月 14 日（水） 5 ・ 6 校時（13:15～15:05）
- 3 対象学年 2 学年全生徒（日本史 A ・ 地理 A 選択生徒）
- 4 外部講師 加賀谷 これ 氏（洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局）
【連携先】 洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会
- 5 内容時程 13:10 体育館へ移動
13:15 学習のねらい説明・講師紹介
13:20 講演「身近に火山があることー洞爺湖有珠山ジオパークの意義ー」
14:05 休憩
14:15 ワークショップ（外部講師・本校教員）
テーマ①「身近に火山があることはメリット？ デメリット？」
テーマ②「私たちにできること～有珠山とどう向き合うか～」
・ グループ協議、発表等、講師からの助言
15:05 閉会・教室移動
- 6 学習過程（全 5 ～ 6 時間予定）

《学習の基軸となる問い》

身近に火山があることはメリット？ それともデメリット？

多角的・多面的に考察し、複数の意見や立場を踏まえて選択・判断したり、
新たな考えを形成したりする。

【学習過程に応じて数々にわたり選択・判断し、振り返りをさせる】

事前学習	2 ～ 3 時間	・ 基礎用語の確認、火山発生のしくみ ・ 日本全国の活火山（御嶽山、草津白根山噴火） ・ 2000 年の有珠山噴火（当時の様子）	選択・判断 ①
外部講師を 招いた学習 （講演・WS）	2 時間	・ 講演「身近に火山があること」 ・ ワークショップ（グループ協議、発表等） 「身近に火山があることはメリット？ デメリット？」 … 双方の意見について、積極的に出さ合う。 「私たちにできること～有珠山とどう向き合うか」 … 複数の立場をロールプレイし、意見を出さ合う。	選択・判断 ②

▼ 事後学習	1 時間	・活動のまとめ、振り返り ・自己評価	選択・判断 ③
-----------	------	-----------------------	------------

7 その他 (1) 事前・事後学習は「日本史A」「地理A」「化学基礎」にて実施する。
(2) 外部講師を招いた学習は体育館で行う。
(3) 研究実践の観点から学習活動の成果等を外部にも紹介する。

本学習では、「身近に火山があることはメリット？それともデメリット？」を基軸となる問いとして設定し、学習段階に応じて数次にわたり生徒に選択・判断させることとした（もちろん正解はない）。

はじめに事前学習として、理科の授業において「噴火のしくみ」や「火山噴火による様々な災害」などについて学習させたほか、地理歴史で「地理A」を履修している生徒は日本や世界における活火山の分布とその影響等について、「日本史A」を履修している生徒は過去における火山災害の事例（富士山・浅間山・桜島・三宅島・御嶽山・有珠山）についてそれぞれ個人で調べ、グループ内でシェアさせた。

このような事前学習を経たうえで、外部講師を招いた「講義・ワークショップ」を実施した。講師を引き受けていただいたのは、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局員の加賀谷にれ氏である。加賀谷氏の講義では、基軸となる問いのヒントとなるような視点のほか、ジオパークの意義、防災における地域の課題などについて多岐にわたり話題提供していただいた。それらはメリット・デメリット双方の側面から、多面的・多角的に考察・構想するための視座となった。講演後、後半にはワークショップとして6名を基本とするグループを構成し、①「身近に火山があることはメリットかデメリットか」、②「私たちにできること、すべきことは何か～有珠山とどう向き合うか～」の2点について考えさせ、それぞれポスターにまとめさせた。特に②については、「市長」「農家」「消防」「医療従事者（医師・看護師）」「芸術家」「高齢者」の6つの立場を想定し、例えば「もしあなたが【市長】ならどう考えるか」といった視点から、具体的政策（アイデア）を構想させるようにした。この「講義・ワークショップ」を通じて、生徒は改めて「身近に火山があること」にどう向き合うか考えていった。

また事後学習では、これまでの学習活動全体を踏まえ、「身近に火山があることについてどう考えるか？」「どのような町づくりやあなた自身の行動が必要と考えるか？」の2点についてレポートさせ、よりよい社会の在り方や地域の未来について主体的に構想させた。

2017年度「日本史A・地理A／化学基礎」 洞爺湖有珠山ジオパークと連携した地域学習 【全員共通ワークシート】平成 年 月 日配付	2年 組 番 氏名	点検
---	--------------	----

はじめに ―地域(世界)を学ぶ・地域(世界)とつながる―

本校「地理歴史科（総合学習）」では、1年次に「縄文遺跡体験学習（9月）」、2年次に「地域の方を招いての歴史・地域学習」（7月）などを行い、教科書に沿った学びだけでなく地域（実物）に触れる学習にも取り組んできました。高校レベルともなると各教科の専門性も高くなり、その授業が実社会とどう結び付いているのか、あまり実感が湧かないところがあるかも知れません。今回は私たちの身近な自然——洞爺湖有珠山——にスポットを当てて探究します。たとえば有珠山であれば「20～30年周期で噴火する」と言われており、前回の噴火が2000年であったことを鑑みると、いつ噴火してもおかしくない状況です。明日噴火が起こったら、皆さんはどう行動しますか。その備えは十分ですか。「そんなことは起こらない」と思っていますか。これから数時間、地理歴史や理科の授業で培ってきた「見方・考え方」や「まとめる力」「考える力・表現する力」を活用し、地域について考えていきましょう。

《学習課題一問いー》

1回目の選択・判断

★あなたはどうか考えますか？【1回目】⇒（ メリットである ・ デメリットである ）

なぜ？（理由）

事前
学習

- 1) 噴火発生のしくみ、噴火に伴う災害の種類 など（化学基礎で生徒全員が学習）
- 2) 日本の活火山、地図による火山分布 など（地理Aの生徒が学習）
- 3) 過去の噴火災害事例 など（日本史Aの生徒が学習）

2回目の選択・判断

★あなたはどうか考えますか？【2回目】⇒（ メリットである ・ デメリットである ）

なぜ？（理由）

【講演・ワークショップ】講師：洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局員 加賀谷 にれ 氏

①「講演」の内容についてメモしよう

②「ワークショップ」（グループ協議）

【課題1】「身近に火山があることはメリット？デメリット？」

【課題2】「私たちは有珠山とどう向き合うべきか？—どのような町づくりが必要か—

〇もしあなたが（ ）の立場だったら、どう考える？

【学習のまとめ】

3回目の選択・判断	(これまでの学習を振り返って)身近に火山があることについて、あなたはどうか考えますか? できるだけ複数の側面や立場から論じなさい。 (①メリットが大きい ②デメリットが大きい ③どちらともいえない) ※正解はありません
未来に向けた創造	身近に火山(有珠山など)があることを踏まえ、どのような町づくりやあなた自身の行動が必要だと考えますか、意見を述べなさい。

【学習に対する自己評価】

A : そう思う B : ややそう思う C : あまりそう思わない D : 全くそう思わない

No	質 問 項 目	回答欄
1	身近な地域の自然災害について興味・関心を高めることができたか	A・B・C・D
2	他者と協力しながら学びを深めることができたか	A・B・C・D
3	よりよい社会の構築に向けて、自らのこととして考えることができたか	A・B・C・D
4	身近な地域の課題を発見することができたと思うか	A・B・C・D
5	身近な地域の課題解決に向けて解決策やアイデアを創造できたと思うか	A・B・C・D
6	自然災害や防災等に関する理解が深まったと思うか	A・B・C・D
7	日頃の地理歴史の学習が、今回の地域学習に役立ったり、つながったりしていると思うか	A・B・C・D
8	日頃の理科の学習が、今回の地域学習に役立ったり、つながったりしていると思うか	A・B・C・D
9	地域のことについて「もっと学びを深めたい」と思うようになったか	A・B・C・D
10	地域のために「行動したい」と思うようになったか	A・B・C・D

★今回の学習にご協力いただいた「洞爺湖有珠山ジオパーク」関係者の方々にメッセージを

6 体験的な学習等の評価方法

ここまで「地域教育資源を活用した体験的・協働的な学習」の実践例として、「縄文遺跡体験学習」「地域の人材を活用した歴史学習」「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習」の3点について報告してきた。こうした学びの意義や有為性については本章冒頭に述べたとおりであるが、留意しなければならない点は、こうした学習が単発的なイベントで終わってしまい、いわゆる「活動あって学びなし」に陥ってしまうこともあるということである。恐らく生徒は座学よりも「学びの楽しさ」を味わうであろう。事後アンケートを実施すると、「意欲的に取り組んだ」「主体的に学んだ」「よく考えた」など、一定の満足な回答を得ることができる。とはいえ本来「振り返り」とは、「楽しかった」「良かった」などの感想を述べることではない。学習を通して、どのような力が身に付いたか、何ができるようになったか（あるいはならなかったか）を“メタ認知”することこそ「振り返り」である。

どの生徒も、当初から高いレベルでの“メタ認知”ができるわけではない（教員側の指導と生徒の訓練が必要である）と思われる。だからこそ、学習の動機付けや方向付け、つながりを意識した事前・事後の学習を系統的に行うことが重要であるとともに、ねらいや目標を明確にした評価計画が不可欠であると痛感する。

そこで前節に紹介した「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習」では、次のようなループリックによる評価規準を作成した。

	評価「A」	評価「B」	評価「C」
学びに向かう力・人間性	身近な地域の自然災害とその影響などに対する興味・関心をもち、対話を通じて他者と協働しながら学びを深め、よりよい地域社会の構築に向けて、自らのこととして意欲的に追究しようとしている。	身近な地域の自然災害とその影響などに対する興味・関心をもち、対話を通じて他者と協働しながら意欲的に追究しようとしている。	身近な地域の自然災害とその影響に対する興味・関心をもち、意欲的に追究しようとしている。
(評価方法)	○ 関心・意欲・態度	○ 関心・意欲・態度	○ 関心・意欲・態度
ワークシート	○ 人間関係形成力	○ 人間関係形成力	△ 人間関係形成力
自己評価 等	○ 社会参画力	△ 社会参画力	△ 社会参画力
思考力・判断力・表現力等	身近な地域の自然災害とその影響などに対して課題を見出し、多面的・多角的に考察したり、他者の意見を踏まえて解決策や新しいアイデアを生み出そうとしている。	身近な地域の自然災害とその影響などに対して課題を見出し、その解決に向けて多面的・多角的に考察しようとしている。	身近な地域の自然災害とその影響などに対して考察しようとしている。
(評価方法)	○ 思考・判断・表現	○ 思考・判断・表現	○ 思考・判断・表現
ワークシート等	○ 課題発見・解決力	○ 課題発見・解決力	△ 課題発見・解決力
	○ 創造力	△ 創造力	△ 創造力
知識・理解	自然災害や防災等に関する基本的事項について、十分に理解が深まっている。(ワークシート・ミニテストの達成状況が70%以上である)	自然災害や防災等に関する基本的事項について、概ね理解が深まっている。(ワークシート・ミニテストの達成状況が40%以上である)	自然災害や防災等に関する基本的事項についての理解に努力を要する。(ワークシート・ミニテストの達成状況が40%未満である)
(評価方法)	○ 知識・理解	○ 知識・理解	○ 知識・理解
ワークシート	○ 読解力	○ 読解力	△ 読解力
ミニテスト等	○ 情報収集・活用力	△ 情報収集・活用力	△ 情報収集・活用力

はじめに「学びに向かう力・人間性」では、身近な地域の自然災害とその影響などに対して「興味・関心を高めていること（関心・意欲・態度）」、「対話を通じて他者と協働しながら学びを深めようとしていること（人間関係形成力）」、「よりよい地域社会の構築に向けて、自らのこととして意欲的に追究しようとしていること（社会参画力）」の3点について、ワークシートの記述や学習態度、生徒自身による自己評価等から評価することとした。

つぎに「思考力・判断力・表現力等」では、身近な地域の自然災害とその影響などについて「多面的・多角的に考察しようとしていること（思考・判断・表現）」、「課題を見出し、解決に向けて考察・構想しようとしていること（課題発見・解決力）」、「新しいアイデアを生み出そうとしていること（創造力）」の3点について、ワークシートの記述や生徒自身による自己評価等から評価することとした。

さらに「知識・理解」では、自然災害や防災等に関する基本的事項への理解が深まったかについて、事前学習におけるワークシート等の取組状況のほか、事後にミニテストを行い、その達成状況から評価することとした。

生徒自身による自己評価では、77ページに記載してあるとおり、ルーブリックの評価規準に照らして質問項目を設定した。正解・不正解が明瞭であるペーパーテストでの採点とは異なり、こうした生徒が記述したレポート等（思考過程）を評価することは必ずしも容易でなく、多忙な仕事量の中で「それなりに時間を要する」「評価が追い付かない」といった点はたしかに課題である。生徒数の規模にもよるかもしれないが、多人数になればなるほど“毎時間ルーブリックに基づいた評価”というわけにもいかないであろう。

しかしながら、何を学んだか、何が身に付いたかといった指標を具体的かつ生徒にとってもわかりやすく示すことができる手立てとしても「ルーブリック評価」は大変有効であると考え。今後はPDCAサイクルに基づいた「カリキュラム・マネジメント」の推進において、ますます「ルーブリック評価」が有効に活用されていくであろう※4・5。

※4 「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習」におけるルーブリックの観点とした「人間関係形成力」「社会参画力」「課題発見・解決力」「創造力」「読解力」「情報収集・活用力」は、本校のカリキュラム・マネジメントにおいて本校生徒に身に付けさせたい資質・能力を踏まえたものである。

※5 「洞爺湖有珠山ジオパークと連携した学習」は平成30年3月に実施しており、印刷の都合上、本研究結果に評価結果の分析を掲載することができなかった。本校ホームページに掲載予定である。